

書評

臨床直結！ 解剖学講義&深掘りディスカッション 下肢編

荒川 高光 (著)

B5 判・196 頁
定価：5,280 円（本体 4,800 円＋税 10%）
医学書院刊，2025 年

これが解剖学の本なのか？！
（でも、おもしろい）

〔評者〕 藤澤宏幸 東北文化学園大学医療福祉学部/日本理学療法学会連合理事長



本書の第一印象は，“読み物として楽しい”である。それでいて解剖学の知識も整理される。しかも、解剖学者の生の声を聴くことができ、「専門家でも知らないことがあるんだ」と、読者は安心して学習を進められる気持ちになれる。

解剖学者の素朴な疑問を反映した各節のタイトルも楽しい。「脊柱起立筋は本当に『脊柱を起立させる筋』なのだろうか？（p18）」などは、読み手の心を揺さぶるフレーズである。著者いわく、「腸筋筋、棘筋、最長筋の中で、横突起の後方に付着し、上下方向に収縮できるのは最長筋だけであり、それこそが脊柱起立筋といえる」という。身体運動学を専門とする者からすれば、腸筋筋も左右が同時に求心性収縮すれば、体幹伸展を生じさせるので、重要な脊柱起立筋だと考えるが、解剖学者との見方の違いを知ることができ、それはそれで新鮮で面白い。

ところどころに出てくる語源も理解を深める手助けになる

し、ユーモアも忘れていない。「大転子の語源は、trochanter（転がるもの）がそのまま『転がっている子ども』という意味で『大転子』となっている。Big angel（大天使）と答える学生もたまにいますが、そこに天使はいない（p50）」などは、解剖学を学ぶ者たちへの愛情が溢れ出ている。

さて、本書の一番の特徴は、著者と運動器理学療法のエキスパートとの対話であろう。超音波画像装置を用いて、生体の内部を観察しながら臨床に取り組んでいる専門家とのやり取りは、解剖学を臨床に活かすための懸け橋になっている。第5章には「臨床に活かせる解剖学」として、そのまとめがしっかりととらされているのもありがたい。加えて、わからないことはわからないとしっかり記載されている点は、学問を究めた者だけが表明できる特権であり、逆に信頼できる。例えば、次のような記載がある。「表層の腰背腱膜から起こる多裂筋もあります。

それは椎骨に起始していないので、何と呼称していいのかわからない（p25）」。心のなかで、“ええっ、そうなんですか!!”と叫びたくなる。交わされる会話にすっかり入り込んで、一緒に突っ込みながら読んでいる自分がいるのに気づく。特に、解剖学の知識をベースに、痛みの原因を深掘りしたい人にとって、本書は有益な情報が埋蔵されている宝の山のように感じられるのではないだろうか。

本書が、これまでの解剖学書にはない、非常に刺激性的な内容であることは間違いない。そのなかで、著者へ要望するとすれば、比較解剖学的視点であろう。進化論の観点から、他の動物との差異について触れてもらえれば、さらに物語性のある解剖学として読者の心に刻まれるのではないだろうかと期待するものである。

本書は、初学者はもとより、日々悩みながら治療に向き合っている臨床家にこそ、手元に置いてもらいたい一冊である。